



2011.02.05 メールにて更新案内をする

なお、私の書きましたお話の更新案内をメールにて行っております。

ぜひ、ご登録くださいませ。

<http://namiyui.sub.jp/a/node/35>

・・・と、いうことで、登録していただいたアドレス宛に、メールで案内を送るシステムを設置しました。

あんまり、スパムとかが多いとやめてしまいましたが、なんか、まっ、面白そうに思ったものだから。

本当にまあ、好き勝手に書いています。

あまり、設定なんかも考えていなくて、猫又三人娘の、はて、猫又とはなんぞやと。

今なら、げげげのきたろう、漢字忘れた、の猫娘辺りが頭に浮かびましょうか。

いわゆる妖怪で、猫が長年生きると尾が二つに分かれ、神通力を発するという・・・、頭に浮かぶのはそのくらいか・・・。

ほとんど知らないことでも、さも知った振りをするというのも、なかなかの技でして。

<http://p.booklog.jp/book/19010>

まっ、可愛い女の子で、その瞳が、人によっては猫の眼に見えるくらいに、イメージを浮かべていただければとありがたく存じます。

2011.01.21 久しぶりに更新する

今年、初めて、パブーのマイページに入る。

また、ストレス発散のために、ぼちぼち、こちらで書いていくかなと思う。

さて・・・。

『異形 月の竹、眠るモノ』 <http://p.booklog.jp/book/19010>

毎度のことながら、適当な設定で、気楽に書いています。ヒロインのはずだった幸がすっかり母親になり、三人娘がお話を回していきます（予定では）。

一部、異形蛇足からの書き写し有りですが、まっ、のんびりと。

[京都放送劇団](#) 「あの日を忘れない」を聴く。

第一部の菜心と姑娘 秋山ちえ子作 朗読 嶋田恵子

聴き取りやすさと感情表現が秀逸で、聴いているうちに、まさに当時の中国に迷い込んだ気になっていた。

内容も、直接は関係ないのだが、以前、岡部伊都子の「加害の女」に衝撃を受けた身として、身につまされるものがあった。

心に鉛の重さを持ち続けようとする主人公の直向さと罪、あえて、罪と表現するが、それを覚醒することでの主人公の変化が面白い。

デイゴの花 岡部伊都子の名を書く以上、沖縄戦についての知識の幾らかはある。ただ、朗読劇という、ある意味、聴覚となる直接的な衝撃は、知識に加えて、まるで、沖縄戦を疑似体験するかのようだった。

太平洋戦争が終わったのが、昭和20年。67年前のことだ。30年代は高度成長期が始まる。まさに戦争を体験した世代というと、例えば当時十代始めなら、十歳の少年少女の今の齢は七十七歳。小さな子供を抱え苦勞を耐えた世代をそのまた十歳上とすれば、当時二十歳、今は八十七歳となる。

年齢を考えるだけでも、太平洋戦争は確実に風化しつつある。

戦争に一切の正義はない。

ある日、突然、他国が武器を手に攻め込んで来た、だから戦争になったとしても、その戦争に、戦いに正義はない、正義を一切認めてはならない。

生きるために、これから生きて行く人達のためにも、あらゆる戦争に正義を認めてはならない。今回の朗読劇を聴いて静かに思う。

我が子を殺してしまうまでに、追い詰められることへの怒りがわかるか、自分の親や子供の苦しみ死ぬ姿を、直視せねばならない痛みがわかるか。

日頃、考えたことのないことごとを改めて考えさせられた。

2015.05.10 ちょっと追加する

ちょっと追加する。

まだ、掲載はしていませんが、続きをごそごそと書いています。

基本的には、思い付きをひたすら綴っており、思い付きが、実際にキーボードにて打ち込むよりも、どんどん、先に展開して行きますので、ある意味、キーボードに打ち込む段階では、その展開に飽きていたりします。

そうなる、ちと、邪魔くさいなあとなってしまうのですが。

ローカル環境では登場人物が一人増えています。

途中でいつの間にか消えてしまうか、ずっと残っていくかは、私にもわかりませんが。

「異形 雨夜閑話」は二話目途中。書き始めた頃から読んでくれている友人に、サザエさんの展開もいいんじゃないかとメールに書く。大きな事件を起こさなくても、日々、ちょっとした笑いや涙をちょこちょこ書いていくのも楽で良いなあと。

雨夜閑話では、鬼との全面戦争を書くつもりだったのだけれど。

「ないふ 流転迷子」は二作目を近日、載せます。もともと、これはwebドラマ企画「おとつれせん」に提供させていただいたお話で、一作目のみ、音のドラマになっています。

おとつれせんでは、ドラマのしぼりとして、列車内、もしくは、駅構内を舞台とする、そして、定期券を印象的な小道具として利用するという約束がありました。「ないふ」の舞台設定は、わりと続きを書きやすい形ですので、三話、四話と書いていく予定です。

2010.07.13 ないふ 二話御案内

ないふ 二話 <http://p.booklog.jp/book/4423/page/35891>

ごく短いお話です、どうぞ、ご覧くださいませ。

多分、一話を書いてから二年後くらいに書いたお話です。

列車で女の幽霊が一人旅をする。一体どうして、なんのために。

わりと、この設定を気に入っています。今度、彼女は誰と巡り会うだろうと思います。

異形 雨夜閑話二話目で停滞中。基本、雨夜閑話は有料にするつもりで以前より書き綴ってきたのですが、読み返すと、ふむ、お金をいただけるような質ではありませんね、私的には残念なこと。

近日、異形 雨夜閑話一話 半分を御案内いたします（一話が随分長くなってしまったので）。二話ではめぐみさんを塾の講師にしようと企み中。異形、何処へ行ってしまうのか・・・。

今晚、「異形 雨夜閑話 一話」をと思ったのですが、読み返すと幸がアダルトなことを申しおりました。

このままですと、規約により、カテゴリーをアダルトにしなければなりません、それは避けたいので、その台詞の差し替えと、以降、数箇所の修正をしております。

「異形 雨夜閑話 一話」 一部抜粋

男たちが近づいてくる、ほんの数メートルのところで、幸は男たちを制した。

「これ以上近づくな、あたしは男嫌いでね」

「うひゃあ、すげえ美人さんだ。な、理絵子、紹介してくれよ」

幸は空から抜き身の刀を取り出した。

「早く鬼に変態しな。人の姿では太刀打ちできないぜ」

「お前、ただの女じゃないな」

「ああ、ただの女じゃない、すげえ美人さんだ」

幸はにいと口を歪め笑みを浮かべると、右手で刀を持ち刃先を男に向けた。

2010.07.15 「異形 雨夜閑話」 公開始めました

「異形 雨夜閑話」を公開を始めました。

一話の半分まで、一話の後半も修正が済んだら載せるようにします。

一応、雨夜閑話、「うやかんわ」とお読みいただければと存じます。

さて、先日、私に小説を書いてみたらと勧めてくれた友人から、コミックを紹介していただきました。

「魔法先生ネギま!」、読んでみて、うまく作ってあるなあをつくづく思いました。ラブコメにアクション、そして少年が高校の先生で、女生徒が三十人、見事と申しましょうか。

ふむ、異形もネギまに見習いまして、たくさんの女性を出していきたいなどと……。

「異形 雨夜閑話」 <http://p.booklog.jp/book/4783>

「異形 雨夜閑話 一話」 01 02を公開しました。

二話は書いている途中です。ちょっと行き詰まっておりますので、二話公開はわりと先になる感じですが。実際、「異形 一話」で終わりのつもりだったのが、ごしょごしょ書いているうちに膨らんでしまっていて、そんなんですから、これから男や幸、登場人物達がどんな経験をするのか、それともしないのか・・・、まったく私にはわかりません。

実際はこれくらいの長さだと、ちゃんとプロットも作って、最後まで見通せていないとなりませんし、本来、そういう書き方をしているのですが、こういう行き当たりばったり、作者的には登場人物達と同時に経験しているような楽しさがあります、これは読む側の人と同じ気分かも知れません。ですから、書いていて楽しくはありますね。

二話完成までの期間、昔書いたお話など、載せたりしつつ、よろしければ、二話をお待ちいただければと思います。

どうぞ、よろしく願いいたします。

異形の時間つなぎと言うのもあれですが、昔書いたオーディオドラマ用シナリオ「海の卵」を載せました。

一人の女性がゆっくりと消えていくそのひとときを描いたものです。

オーディオドラマ用シナリオ「海の卵」 <http://p.booklog.jp/book/4961>

異形 雨夜閑話 二話 一部抜粋

途端、啓子の体が微かに浮き、独楽のように右脚が幸のこめかみをなぎ払った。激しい勢いで幸の頭が首から千切れ壁にぶつかる、首から、血が吹き出した。

「う、うわぁっ」

幸の血で真っ赤になった啓子が大声で

2010.07.18 異形の挿し絵を描いていただけませんか

「異形」、「異形 流堰迷子は天へと落ちていく」、幸いにも、「お気に入り」など、関心を持ってくださる方もあり、ありがたい限りです。

さて、以前より挿し絵があれば良いのになと思っておりまして、私もマンガの描き方などの本を買ってきました、少し練習していたのですが、どうも、不器用なもので思うように書くことが出来ません。

そこで、今回、考えつきましたのが、挿し絵を募集させていただくということ。

なにぶん、無料でご提供しているお話なので、挿し絵代をお支払いすることは出来ませんが、それでも良いということでしたら、挿し絵を描いていただけないでしょうか。

アダルトっぽいもの、また、著作権を侵害していそうなものは困りますが、縦横300pxくらいまで、私宛にメールにてお送りいただければ、あまりにもちょっと・・・、ということになれば、文中に入れさせていただこうと思います。

来月、8月一杯まで募集しております。

どうぞ、よろしく願いいたします。

なお、挿し絵の諸権利は描かれた方にあると、私は判断しております。ただ、見栄えのため、縦横、同じ比率で縮小することがあるかも知れませんこと、ご留意くださいませ。

メールアドレス

am0329@kpd.biglobe.ne.jp

2010.07.19 「異形 雨夜閑話 二話」公開しました

「異形 雨夜閑話 二話」公開しました。

こちら <http://p.booklog.jp/book/4783/page/43607> からどうぞ。

しかし、うーん。

少々、へたばってきました。

お話を書くというのは案外、エネルギーが必要です。そろそろ、夏ばて気味でもありますし。今後、あかねちゃんを再登場させる予定ではありますが、以前より、書きかけのままにしていたオーディオドラマシナリオ「黒い傘 流堰迷子は天へと落ちていく」を仕上げたくあります。

「異形」はしばらくお休みしたいなと思います。

挿し絵の募集は続けておりますので、どうぞ、よろしく願いいたします。

monobe toshiyuki

失念していたこと 2010.08.25

よくよく、考えてみれば、あかねちゃんが廃人のようになっていたのなら、それまでに両親や爺さんが、男に相談していますよね。そういうの、すっかり、忘れていたなあ・・・。
その分のエピソードを何処かに入れておこうかな。

へとへとな日々を送っております **2010.08.24**

自動車関係の仕事をしている都合もあり、いま、新車補助金の駆け込み需要で大わらわです。

さて、飽きもせずに「異形 雨夜閑話」を書き綴っております。来週末ぐらいには更新できるかと思っておりますが、ふむ、全くの思いつきで3匹の猫、猫又というのですか、お話に加えてみたのですが、（9話では白澤さんは普通の人間として書いていたけれど、帳尻合わせておかねば・・・）、妙に気に入っております、基本、猫好きでもありますし。

続きは猫 クロを中心にお話が廻っていきます、おおよそ・・・。

<http://p.booklog.jp/book/4783/page/76011>

上のアドレスに異形 雨夜閑話三話 02 を追加いたしました。

なんかあれですね、和気藹々とした家族という存在に憧れているのかなあ、話がホーム・コメディっぽくなってしまっています。

作者的には鬼と戦うの、他に任せて、みんなで楽しく暮らしていきなよって気分だったり。

ぼちぼちですが、雨夜閑話、続いています。私のブログの方に追加分をちょこちょこ書いています、ある程度まとまったら、こちらに移すかなと考えています。

ただ、「黒い傘」を、わりと熱心に書き出したので、ちょっと書く速度は落ちました。

さて、五年前に書いた文章。



京都新聞2005.3.23朝刊「60年目の肖像 従うという罪かみしめて 岡部伊都子」

岡部伊都子女史の見方、捉え方には関心があります。

今回の京都新聞での文章も是非全文を読んでほしいと思います。

一文だけを抜き出すと、意味合いが変わってしまうかもしれませんが。

「いま、いのちを大切に作る人間性を日本人はなくしたのではなく、前から持ってへなんだ。前持って今ないというのと違います」この一文にも感動いたしました、なるほどそうだったのかと納得した次第です。

どうして日本という国は、そしてこの国に住む多くの人たちは、何につけ、強者に阿り、弱者に冷酷でいられるのか、これは根本に生命を大切にするという思想・哲学が欠落している、そう考えればこの国の現状を理解できます。

様々な事件、それは殺人事件だけでなく、経済、政治、教育、これらも岡部女史の一文を想定して考えると本質が見えてくるように思います。

さて、実はこの岡部女史の一文を材料にエホバの証人の輸血事件とそれをきっかけに変わった医療について書いてみたくなりました。元気があれば書いてみようと思います。

「黒い傘」は岡部伊都子の文章を読んだのをきっかけに書き始めましたが、テーマが重く、心が丈夫な時でないとなかなか書けません。ですから、書き始めて五年も経っています。

原稿用紙400字詰め六〇枚程度になる予定ですのに。

お盆休みと云うことで・・・

まっ、何処行く当てもなく、少々のことと、お話の続きを書いていました。

<http://namiyui.com/index.php?itemid=528>

若くて元気だった頃、はあ、やれやれ、よっこいしょっと・・・。

私も武術の練習で、仕事を終わると、先生宅に行き、近所の公園で明け方まで稽古を付けて貰うと云うことを続けていました。ですから、稽古の描写とか、出来なくもないのですが、ストレス発散を主目的にしております以上、あんまりね、入り込んで書かなきゃというのは、ちょっと・・・。

場面を切り替えることで、手抜きをそれっぽく見せるという手法を利用しつつ、さて、これからどう書いていくか。

ああ、なんか難しいですね。

しょうがない、朝ご飯の描写から始めよう。何事もなく、みんなで朝ご飯。礼子と理恵子と倉沢、この三人が共同で朝ご飯を作る、で、いいんじゃないかなあ。

夜雨閑話三話 最新版はこちらに。 <http://namiyui.com/index.php?itemid=526>

なんだかもう、話がどう転んでいくか、わかりません。

ただ、思いつきを連ねていくのは気楽で楽しいですね。

「黒」の修行の様子を実際に描いていくかどうかはわかりませんが、多分、その辺、書いてて退屈だろうし、調べなきゃならないことも出てくるだろうしなあ。

まっ、なんというか、毎回、もうやめ、書くのしんどい、と呻きながらも書いているのは、何処か楽しかったりするからでしょうね。読んでくださる方にも、読んでいて楽しいなあと思っていただければ嬉しくあります。

異形 雨夜閑話 三話 01 <http://p.booklog.jp/book/4783/page/57854> から少し足しておきます。

幸乃が初めて恥ずかしげに笑みを浮かべた。

「おまえさまの右腕だけですが……。妹のおかげです」

茫然としていた白澤は意識を取り戻すと呆れたように笑った。

「相変わらずね、貴方は」

「お褒めいただきありがとうございます」

幸乃は平然と答えると、辺りを見回した。

「ホテル全体が澱んでいますわね。上から澱が滴って来るようね」

「会場は八階、鳳凰の間ですわ。さあ、どうぞ」

男はふとエレベータを見たが、視線をそらすと、職員用階段を見つけ、そちらへ向かう。

幸乃が振り返り、白澤に言った。

「おばあさん、無理せずエレベータをお使いくださいね」

「エレベーターに食われるような、人生の終わり方はまっぴら」

嫌みたらたら白澤が答えた。

鳳凰の間の前では、記帳のための席が設えられ、対応のため、女性が二人、座っていた。

男はふと立ち止まり、幸乃に話しかけた。

「父さんの中に隠れていなさい、鬼も術師もたいした違いはない、部屋の中は障気で満ちているようだ」

幸乃はうなずくと、男の体に溶け込んだ。

「本当にお前の娘は人間ばなれしているねえ」

白澤がほとほと感心したように言った。

「ちょっとした個性というものですよ」

男は笑うと、そのまま、何事もなかったように部屋へと入って行った。

「記帳もせずに扉を開けるお前もなかなかのものです」

ふと、白澤は男の若い頃、まるで刃のような気配を漂わせ人を否定していた頃と今の和やかになった男を思い比べ、これも娘のおかげかと納得した。

少なくとも鬼ではない、しかし人間と言い切るのは躊躇われる、立食パーティーの様を言葉にすると、そんな表現になる。

老若男女、様々な年齢の少しばかり、人間ばなれした異形のものたち、呪術の多くは神だとか、悪魔、魔物の力を借りて発動させる、言わば、人の体は力の流れる通路のようなものだ、しかし流れるのは力だけでなく、呪術者の多くはその力借るモノたちに体も考え方も従属し始めてし

まう。ふと足元に気配を感じる、見下ろすと、芋虫のように体を波打たせながら、若い女が通り過ぎて行った。

「旧支配者の流れか・・・」

男は呟くと辺りを見渡した。いくつもの遠景のテーブルが並び、そこかしこで談笑が交わされている。この談笑の影で、鬼対策の会議が開かれているのだろう。

美しい女が、笑顔を浮かべ、接待だろう、プレートにワインを注いだグラスを男に差し出した。

「赤ワイン、それとも白ワインがよろしいでしょうか」

男は少し寂しそうに笑みを浮かべると、手でそっと制した。

「アルコールは苦手なのです。体が受け付けられないので」

男はついつと女の持つプレートを片手で支え、顔を寄せ囁いた。

「派遣会社からいらっしゃったのですね。君の名は田中さん、私の娘と同じくらいの年格好だ、ここは恐くないですか」

引きつったような声で女が呟いた。

「ごめんなさい・・・」

女が笑みを浮かべたまま、涙を流した。

「正直にどうぞ」

「恐くて仕方がありません」

男はプレートを受け取り、テーブルに置いた。

「エレベーターはいけません、喰われてしまいます。階段を思いっきり走りなさい、そして、このホテルから逃げ出さなさい。もしも、引き留められたときは・・・」

「引き留められたときは」

男が呟いた。

「我、無の眷属なり、我に触れるな。そう、叫びなさい」

男はふわっと女の後に廻ると背中に触れた。軽く押す。

「走れ」

男の言葉に女が駆けだした。

「こんなところに普通の人を入れるなんてな」

男は呟くと、もう興味をなくしたように辺りを見回す。

見つけた、あかねちゃんだ。

あかねがテーブルについていた、随分と顔色が悪い、疲れ切っているようで顔を上げているだけで精一杯のようだ。

本当に思いつきと気分だけで書いています。さて、今後、白澤さんをどう使うかなと思案中。

多少は思案する。

異形 雨夜閑話三話 ちょっと更新

昨日、異形 雨夜閑話三話をちょっと更新しました。

やっと、お話としては動き出すかなと思いますが、私、既に夏ばてです。

書く元気がない。息しているだけですよ、ほんと。

常に書き続けていないと、検索でも下に下がっていきますし、まっ、一時に比べて随分下がりましたが、ふむ、右肩下がりを受け入れているこの頃。

そろそろ限界か。

ただ、登場人物達がちゃんと収まるべきところへ収めてやるのも、作者の仕事であります。

「みんな、しあわせになりましたとさ」で収めたいと、ちょっと思ったりもしていますけど……。

「黒い傘」というシナリオ、初の私の有料本にするつもりです。仮に100円と致しまして、費用が3割かかるんでしたっけ、とすると1冊、70円か。で、10冊売れば700円、100冊で7000円ですよ。

と、しますと……。

10万冊で、あなた、700万円ですよ。笑いが止まりませんなあ、はあ。ああ、しんど……

。

難しい計算をしすぎて、欲と知恵熱が出てしまいました。

それでは、また。

三話、これまでのお話は下記アドレスをご覧くださいませ。

異形 雨夜閑話三話 2010.07.23版と「海の卵」 <http://p.booklog.jp/book/4491/page/47748>

男は部屋に戻ると、机に置いた茶封筒を掴んだ、珍しく郵便受けに入っていたものだ。ごみ箱に
と思ったが、気を取り直して開封する。

白紙の便箋が一枚。

「今頃、本家がどの面下げて、ってな話だが、白澤のおばさんには義理がある」

男は吐息を漏らすと、椅子に座ったまま目を瞑った。

男は子供の頃の、みずち家に囚われていた記憶を蘇らせる、殺されずに抜け出せたのは、白澤妙
子の機転と勇気によるものが大きい。

幸と本家に乗り込んだ時、無理にでも連れ帰れば良かったのだろうか。一緒に帰りましょう、恩
返しをさせてくださいと言った言葉に偽りはない。

「お父さん、いい」

襖の向こうから幸が男に声をかけた。

「どうぞ」

幸は男の部屋に入るとにっと笑った。

「恵さん、凄いよ。教えるのが巧くて的確だ」

「そっか、人ってのは本当に面白いな」

「お父さん、一步、引くといろんなものが見えて来るし、現れて来るね」

「幸 おいで、そしてね、父さんに背中向けなさい」

「こうかな」

幸は椅子に腰掛けた男の前に立つと、男に背中を向けた。

男が、左手を摩るように幸の首の後ろから、肩、背中へと触れていく。

「滞ってたのが、綺麗に流れている」

男が手を戻すと同時に幸が振り返る。

「お父さん、ありがとう」

「父さんはちょっと方向を指さしただけ、実行したのは幸だよ。でもさ、ありがとうって言われ
ると、嬉しいな。幸、ありがとうって言ってくれて、ありがとう」

幸は男をぎゅっと抱き締める、ふと、手紙を見つけた。

「お父さん、これは」

「招待状だ。観月の宴。もっとも、ホテルの中なんだから、月を愛でるのは目的じゃない」

幸は男にしな垂れかかったまま、右手で便箋を男から受け取った。

「白澤さんからの御指名かぁ、幸は苦手だ、あのおばさん、調子狂っちゃう」

「向こうもそう思っているんじゃないか」

男が笑った。

「それに、お父さんを子供扱いするんだもの」

「まっ、年寄りには得てしてさ」

「あれ、お父さん、これ、今日だよ。もうすぐ、始まる」

「律義に最初から座っている必要はないさ」

「お父さんは行くつもり、それなら、幸がボディガードについて行くよ」

「それは安心。幸がいてくれれば百人力だ。でも、だめ。ここにいなさい」

「行く、行く、行くよ。幸にはお父さんを護る義務が有るもの」

「そんな義務はないよ」

男は笑みを浮かべると幸を立たせた。

「啓子さんも恵さんも言ってたけど、ここはシェルターみたいなものだ。そして、ここがその機能を果たすには、鍵である父さんか、畑を作って地に深く縁が出来始めた幸のどちらかがいないといけない、昼間ならともかく、夜、長く二人がここを空けるのは良くないんだ」

九話を公開しないと、繋がっていかない方向になってきました。

九話のあらすじだけでも載せておくようにしようかと思っています。

まったく新たに有料の本を書いてみたいと、まっ、気持ちだけは持っています。

シナリオ 海の卵

トップページの人気ページに「海の卵」を載せてくださっています。

当時、ものすごいプレッシャーの中、気が狂うかも、死んでしまうかもと、思いながら書いたお話でした。あの頃は、真剣に書いていたなあ、あの頃の自分が今の自分を見たら、なんて情けないと涙するかも知れません。

異形 雨夜閑話三話 ちょっと書き足したので載せておきます。

異形雨夜閑話3話

「私、おじさんに罪を被せようと思いました、大声で痴漢って叫ぼうと思いました」
全員が硬直した、男や幸までも。

全員がテーブルにつき、晩御飯を食べようとした瞬間だった。倉澤は突っ立ったまま、ぼろぼろに涙を流していた。

「えっと・・・」

啓子が呟いた。

「ここは先生が倉澤さんを泣かしたということで収めればいいのではないかと」

「そう・・・、だね。お父さん、倉澤さんに謝ろう」

幸も呟く。

「ごめんね、倉澤さん。だから、もう泣かないでくれるかな・・・」

男はどうしたものかと戸惑っていた。取り合えずというのは嫌いだが謝ってこの場が収まるのならそれでいい。

「ごめんなさい、私、おじさんや皆さんにこんなに優しくして貰って、なんだか、とても自分が悪く思えて、ううん、とっても悪い人間だから・・・」

幸は立ち上がると倉澤をぎゅっと抱き締め、そっと彼女を座らせた。

「そのことは許すよ。倉澤さん、男二人に脅されてのことだよ、男はとっても怖い野生動物だからね、仕方ないよ」

男以外のここに居る全員が、あんたは違うでしょという突っ込みをぐっと抑える。

「お父さんも怒ってないし、幸も怒ってないよ」

男は既にナポリタンを食べだしていた。それを見て、啓子も食べ出す、おおよその予想がつく、父親以外の男が如何に邪悪な存在か、幸の演説が始まる、話が終えるころにはすっかりナポリタンも温野菜も冷めてしまうだろう、

「啓子さん、トマト、美味しいですよ」

「今までのトマトって、偽物だったんじゃないかって思うよね」

恵の言葉に啓子が頷いた。

「それ、言えてる。あたしもここのトマトなら食べられるもの」

礼子が嬉しそうに言った。

幸は出先を挫かれて、ううっと唸っていたが、肩を落とし言った。

「倉澤さんも早く食べよ、暖かいうちに」

幸が男の横に戻る、男は幸の頭を撫でた。

「ちょっと成長したね」

「お父さんが一番最初に食べ出したよ」

幸が拗ねたように男を見つめた。

「お腹減ってたからね」

男が少し笑う。

「お腹減っている人達にまだ食べるなど言っている自分を想像してごらん、孤独な独裁者になってしまう、独りぼっちになってしまうぞ」

男はくすぐったそうに笑うと、手を戻し、サラダを食べる。

「幸の育てたトマトは美味しい」

幸は溜息をつく、ナポリタンを食べ出した。

「今日は啓子さんにも叱られたし、お父さんにも叱れたよ」

「つまりは今日だけで幸は随分と成長したわけだ。おめでとう」

「おめでとう、幸さん」

啓子が笑った。

「幸さん、おめでとうございます」

恵まで楽しそうに幸に声をかけた。

「あ、なんだか、嬉しい気分。ああ、幸は単純すぎるよお」

幸が俯いて頭を抱えた。

「おめでとうございます」

礼子と理恵子が声を合わせて言った。

「あ、あの、えっと、おめでとうございます」

分からないなりに、倉澤まで幸に声をかけた。

「自分で一人喋るより、いっぱい、声をかけて貰う方が楽しいだろう」

幸はそっと顔をあげると呟いた。

「うん、ありがと・・・」

皆が声を出して楽しそうに笑う。

二時間近く、お喋りをしながらの晩御飯は、幸にとってとても楽しいものだった、それは倉澤も同じで、こんなふうに分かたれず変わってしまうのが信じられないくらいだった。

男は食べ終わると、食器を洗おうと立ちかけたが、ふと思いつき、幸に声をかけた。

「幸、倉澤さんに数学を教えてあげてくれるかな、それに恵さんにも頼んでくれないか、彼女に

英語を教えてくれるように」

幸は恵が高校の英語教師になるつもりだったのを思い出した、もっとも、非合法組織のスカウトにふらふら付いて行ってしまい、今に至るわけだが。

「それいいな、うん、頼んでみるよ」

男は頷くと、流しへと向かった。

恵はととと幸の横に来ると、興味深そうに幸の顔を覗き込んだ。

「幸さん、何をすれば良いですか」

「倉澤さんに英語、教えてくれないかな、何カ所か勘違いしているところ、直したら一気に理解が進むと思うんだ」

「幸さんの仰せなら、例え火の中、水の中」

「つまり冬は暖い炬燵の中、夏は冷たいプールの中ってことだ」

啓子が笑った。

「穿ってるなあ、啓子お姉ちゃんは」

「えっ・・・」

啓子が驚いて恵を見つめた。

恵は気にする風もなく、倉澤の隣りに座る。

「早紀お姉ちゃんって呼んでいい」

恵が屈託なく笑みを浮かべる。

「は、はい」

「私のことは恵って呼び捨てにしてください。これから早紀お姉ちゃんに英語を教えてあげます」

「恵ちゃんって、ひょっとして帰国子女なの」

恵は横に首を振ると、じっと倉澤を見つめた。

「ネイティブは自信ありません、でも、受験英語にはかなり自信有ります」

啓子が小声で囁いた。

「幸さん」

「ん・・・」

「恵・・・、ちゃん。のりのりだ・・・」

「凄いよね」

「おっきいお姉ちゃん達、なにか」

「いいえ、何も・・・」

幸と啓子の声が重なった。

ある程度、まとまったら、「異形 雨夜閑話 三話」として掲載しようと思っています。

異形雨夜閑話3話

「私、おじさんに罪を被せようと思いました、大声で痴漢って叫ぼうと思いました」
全員が硬直した、男や幸までも。

全員がテーブルにつき、晩御飯を食べようとした瞬間だった。倉澤は突っ立ったまま、ぼろぼろに涙を流していた。

「えっと・・・」

啓子が呟いた。

「ここは先生が倉澤さんを泣かしたということで収めればいいのではないかと」

「そう・・・、だね。お父さん、倉澤さんに謝ろう」

幸も呟く。

「ごめんね、倉澤さん。だから、もう泣かないでくれるかな・・・」

男はどうしたものかと戸惑っていた。取り合えずというのは嫌いだが謝ってこの場が収まるのならそれでいい。

「ごめんなさい、私、おじさんや皆さんにこんなに優しくして貰って、なんだか、とても自分が悪く思えて、ううん、とっても悪い人間だから・・・」

幸は立ち上がると倉澤をぎゅっと抱き締め、そっと彼女を座らせた。

「そのことは許すよ。倉澤さん、男二人に脅されてのことだよ、男はとっても怖い野生動物だからね、仕方ないよ」

男以外のここに居る全員が、あんたは違うでしょという突っ込みをぐっと抑える。

「お父さんも怒ってないし、幸も怒ってないよ」

男は既にナポリタンを食べだしていた。それを見て、啓子も食べ出す、おおよその予想がつく、父親以外の男が如何に邪悪な存在かの演説が始まる、話が終えるころにはすっかりナポリタンも温野菜も冷めてしまうだろう、

「啓子さん、トマト、美味しいですよ」

「今までのトマトって、偽物だったんじゃないかって思うよね」

恵の言葉に啓子が頷いた。

「それ、言えてる。あたしもこのトマトなら食べられるもの」

礼子が嬉しそうに言った。

幸は出先を挫かれて、ううっと唸っていたが、肩を落とし言った。

「倉澤さんも早く食べよ、暖かいうちに」

幸が男の横に戻る、男は幸の頭を撫でた。

「ちょっと成長したね」

「お父さんが一番最初に食べ出したよ」

幸が拗ねたように男を見つめた。

「お腹減ってたからね」

男が少し笑う。

「お腹減っている人達にまだ食べるなど言っている自分を想像してごらん、孤独な独裁者になってしまう、独りぼっちになってしまうぞ」

男はくすぐったそうに笑うと、手を戻し、サラダを食べる。

「幸の育てたトマトは美味しい」

幸は溜息をつくと、ナポリタンを食べ出した。

「今日は啓子さんにも叱られたし、お父さんにも叱れたよ」

「つまりは今日だけで幸は随分と成長したわけだ。おめでとう」

「おめでとう、幸さん」

啓子が笑った。

「幸さん、おめでとうございます」

恵まで楽しそうに幸に声をかけた。

「あ、なんだかね、嬉しい気分。ああ、幸は単純すぎるよお」

幸が俯いて頭を抱えた。

「おめでとうございまーす」

礼子と理恵子が声を合わせて言った。

「あ、あの、えっと、おめでとうございます」

分からないなりに、倉澤まで幸に声をかけた。

「自分で一人喋るより、いっぱい、声をかけて貰う方が楽しいだろう」

幸はそっと顔をあげると呟いた。

「うん、ありがと・・・」

皆が声を出して楽しそうに笑う。

二時間近く、お喋りをしながらの晩御飯は、幸にとってとても楽しいものだった、それは倉澤も同じで、こんなふうに自分の今までと変わってしまうのが信じられないくらいだった。

わりと他人が書いた本をよく読みに行く。

見事だなあと思う本もたくさんある。

[ぼくにご主人様](http://p.booklog.jp/book/2078) <http://p.booklog.jp/book/2078>

隙のない話に仕上げているなあと思う。小説は、隙や矛盾があると、そこで現実に戻ってしまうため、小説の世界を楽しめなくなるわけだ。

さて、

ひかり。 <http://p.booklog.jp/book/6192>

小説としては組み立てられてはいないが、わりと好きな短文だ。前後に話を接いで、一つの掌編にしたいと、そんな気にさせる。多分、似たような方向を向いているのかも知れない。

追記

異形 雨夜閑話 男と黒が、本家へ乗り込むところを書いています。

2010.09.25 ごめんなさい、一転しませんでした

少し追加しました。

ごめんなさい、お話は一転しませんでした、今まで通り、気楽に話は進んでいます。

<http://p.booklog.jp/book/4783/page/101114>

久しぶりにあかねの祖父を登場させました、相変わらず、幸とは犬猿の仲です。

お外でお仕事の人ですから、この暑さ、すっかりへたばっております

異形は、今まで数回、書くのやめ、もう書かないと中断することがありましたが・・・、いま、少しばかりそんな状態です。

また、数日、経ったら書きたくなるかもしれませんけど。

昔、シナリオ書きでお世話になった先輩の名前をインターネットで検索しますと、華々しく活動されているなあと、羨ましいという気持ちはありません、いや、却って嬉しいなあとという気持ちですね。

私自身は挫折して途中退場、これは自分自身の才能と努力が足りなかったわけで、ある意味、納得済みで退場しまして（卒業とは言えない）、競う気持ちも無くなり、こうして、好き勝手なお話を書いているだけで充分、満足しているせいかもしれません。

はあ・・・、異形の続き、書くかなあ。

雨夜閑話 三話 04を公開しました。

<http://p.booklog.jp/book/4783/page/93079>

ちょっと・・・、あれっ。あらかじめ思っていた方向と違ってしまいましたが、書いてて、この方が楽しいので、まっ、いいかなと思っています。

鬼達との血で血を洗う抗争を書かねばならないのですが・・・、いえ、あかねちゃんのことや、幸と黒達のケーキ食べ歩き、あさぎの商店街デビューなど書かねばならない懸案も多々ございますので。

2010.09.06 有料本を作る

なんとなく、思いついて、有料300円に設定した本を載せました。

特に理由があってというわけではないのですが、なんとなく、お金払わなきゃ読めない本の一つや二つ、置いておきたいなあ・・・、という、敢えてそれが理由ですけど。

もっとも、この本を書いた頃は、文章を書くことに真摯で、このお話も1年くらい、ああでもないこうでもないと思案していたと思います。

ある意味、載せはしたけど、恥ずかしいから読まないでくれと有料設定したのかもしれませんが。

異形シリーズは無料を通しますけど。

2010.09.07 雨夜閑話四話につきました

異形 雨夜閑話四話を書き出そうとしております。

猫娘とあかねを主にして展開していくかなと思っています、思っているだけですけど。
なんせ、思いつきを書き連ねているだけですから。

あと、猫娘三人の性格を書き分けなければと思いますね、さて、あさぎをどうするか、あれでございませぬ、思いつきで登場人物を増やしてはいかんと反省しております。とりあえずは、佳奈さんに何とかしてもらいたいと勝手なことを考えております。

いつから、鬼と戦争するんだというようなものですが、反戦主義の私でございますし、荒事は本家にお任せして、楽しく暮らしたらいいんじゃないの、という気持ちもなきにしもあらず。

男が本家に指導しに行く分は割愛、書いていて華がありませんから、なんか書いていてつまらなそうですし。

こんな感じで、ぼちぼちと雨夜閑話四話を書いていきます、多分・・・。

2010.09.19 いくつか削除する

カテゴリーを「ファンタジー」にして検索してみる。

わりと上位に私の書いたお話がつらつらと並んだ。うーん、とちよいとばかり考えてみる。私はストレス発散のためだけに、やくたいもないお話を書いて遊んでいるだけであり、作家になりたいという気持ちもない。

私の書いたお話が全て上位に並ぶのは、ちょっと他人よりも先にこのシステムを利用しただしたというだけでもあるし、ならばと、有料本と異形シリーズ、それとこの日記を残して、他は削除した。

[幻影悠華譚](#)は、その出来不出来はともかく、力と熱意を入れて書いたものであったし、異形は、今がちょうど、書いてて楽しいので残した。

異形 雨夜閑話 四話

あかねちゃんが意識を取り戻したお祝いにケーキパーティーが始まります、・・・予定。

2010.09.21 ケーキパーティー、ちょっとお預け

雨夜閑話 四話 02を書き出しまして。

意気揚々と男と黒と白、ケーキを買いに行くのですが、途中、花魁道中に遭遇、そこから、お話が一転します。

本当になんといいましょうか、思いつきで進めているなぁと自身に呆れますが、その方が書いていて楽しいので。

久方ぶりに、少しばかり、男の悪の部分が出てきます。

もうしばらくお待ちのほど。

って、待っている人、いるのか・・・。

2010.10.03 急遽終了について

異形 雨夜閑話 急遽、終了いたしました。

なんと云いましょうか、気持ちが追い込まれてしまいました。空に練り言を書き綴っているような不安感に取り込まれてしまったと申しましょうか。

しばらくは創作全般、お休みさせていただき、書きたい衝動が現れ出しましたとき、再開させていただきます。

動静はこちらに書く予定。

<http://namiyui2.jugem.jp/>

異形蛇足 三毛

毎度の事ながら、安易な書名です。

男は家を離れ、梅林の中にいた。

ひたすら立ち続ける。日が昇り、柔らかな陽光が大気を解きほぐす。肩幅に足を開き、両腕を垂らす。ふと、男の背にした一本の梅の木、その梢に影が浮かんだ。三毛が梢に座り、興味深そうに男を眺めていた。

「やあ、三毛。どうした」

ふっと、三毛の後ろで男の声が響いた。三毛が慌てて振り返る、何もない空間があるだけだった。

「ここだよ、ここ」

今度は三毛の頭の上で男の声が響いた。驚いて、三毛は顔を上げた。青い空と枝があるだけだった。

三毛の耳元で男の声が囁いた。

「ほら・・・、ここだって」

「う、うわああっ」

三毛が足を踏み外し、梢から落ちる。瞬間、男が両腕で三毛を抱きかかえ着地した。

「はは、びっくりしたか、三毛」

「先生、ひどいよ」

男は三毛を降ろすと、あぐらをかいて、三毛を見上げた。

「ごめん、ごめん、じっと立っているのに飽きてさ。まっ、怪我しないようにしたし、勘弁してくれ」

一部抜粋。

シナリオ 「黒い傘」を書きながらなので、なかなか進みませんが。

このところ、しんどくて創作の時間がとれません、貧乏暇無しというやつです。

2010.11.15 ちょっと再開

ちょっと再開。

下記のアドレスにてちょっと書き始めました。

<http://namiyui.com/doku/doku.php?id=igyoku0001>

異形蛇足、これは一連のシリーズもので、本編とは直接関係のない、たまにあたりもするけれど、そんな掌編集です。かなり、初期から書いていますが、今回、書き始めたのが、異形蛇足、初の公開です。

2010.12.25 久しぶりにパブを覗く

こちらで、お話を書かなくなると、サイトを見ること自体が減ってしまいますね。

<http://namiyui.com/doku/doku.php?id=igyau0002>

ちょっとだけ更新中。

2011.03.21 少し更新

異形 月の竹、眠るモノ 一話を載せました。

私のサイトでも、<http://namiyui.sub.jp/a/node/27> にPDF版をリンクしておりますが、ちょっとばかり、前半、短いお話が追加されています。

二話以降では、男の過去を重ねつつ、戦いを書いて行きたいと思っておりますが、そろそろ、まったく違う話も書きたいなあとか、ちょっと思っていたりもします。

『異形』を書き出して髓分が経つ。

特に考えることなく行き当たりばったりで書き出したのが、ちょっとした文庫本の小説くらいの分量にはなっているようだ。

そして、最初は男と女の二人きりだったのが、女に姉妹が出来、また、その女に娘が3人出来た。

その上、友人達もたくさん増え、いまや大家族だ。

なんとかダディにも負けない。

多分、私自身がたくさんの家族を欲していて、それがそういう形で表現されているのであろうし、ひょっとしたら、そういうのを求めている人も多いかもしれない。

現在、『異形 漣』では、漣という女の子を登場させている、前回の『撃』では津崎椿を登場させたが、いろいろと絡めていければ楽しいと思っていたりする。

異形 漣 は <http://namiyui.com/201201g/doku.php?id=ren01>

後日、こちらのパブーにも載せる予定。

なお、異形 撃は一部有料となっております。有料部分の話の展開は、男が旅立ってしまうというだけのことなので、有料版を読まなくても、話の続きを理解していただけるかとも思っていたりする。